

さて御祭神の御名は古事記に宇摩志麻遲命、日本紀に可美真手命、舊事記に味間見命ともあるが、そのウマシといふのは可美ではめた稱辭であり、マチは占の意なる麻知と解すべく、乃ち命の御父神の饒速日命は、天祖の授け給うた天璽瑞寶十種を捧じ、天祖の勅を奉じて天磐船に乗つて河内國岫峯に降り、大倭國鳥見白庭山に遷座、長髓彦の妹三炊屋媛を娶つて御祭神を生まれ給うた。しかし神武天皇の御東征に方り御祭神は大義に順うて、長髓彦を誅し給うたので、天皇はその忠節を嘉して詔靈の神勅を授けてその大勳を賞し給うたが、天皇の御即位の元年には、御祭神は五十櫛をたて、齋し、詔靈劍を殿内に奉齋し、またかの十種瑞寶を藏めて天皇のために鎮祭あらせられた。そこで天皇の寵異を蒙り、特に御殿内に近宿して足尼の號を受け、御即位式には内物部を率ゐる矛楯を立て、威儀を嚴にし給ひ、同十一月には再び天皇のため鎮魂壽祚の祈請を遊ばされた。此等は皆永く朝儀の先蹤となつたものであります。しかも恐らくその物部といふのも、齋もしくは鎮魂祭の縁による名であらうが、後世武力を以つて一族が榮ゆるに及び、物部即ち武士の義とさへなつたのであります。

當社の社傳によると、御祭神の當社に御鎮座については、次の如く傳へて在ります。乃ち御祭神の御武勳等によつて、中原は既に平定したけれど、邊境尙未だ泉澤に浴せず、凶頑の徒各所に割據して、往々王命に抗する者あり、天皇諸臣に征服を命じ給うたので、御祭神は天香山命と俱に、天つ物部を率ゐ

て、尾張・美濃を巡按して、越の國に入り、安麻背・頸城の賊、飯取・曾守・亞理・箭田川・九嶋の妖賊を平定して復命し給うたが、更に詔を蒙つて、香山命は再び越の國に赴きて、彌彦山に鎮座しましたし、當社御祭神は播磨より丹波路を歴巡して石見に來り給ひ、都留夫・忍原・於爾・曾保里の各處に屯聚せる凶賊を討ち平げまして、國中を安らげ鎮め給ひ、嚴齋をこの地に据ゑて、天神を鎮祭なされた。その齋は今に齋きて一瓶社と稱してゐる。御祭神は鶴峯山に登つて國見せんとて八百山を瞻望し給ひ、奇哉斯山、わが御祖の居ます天迦具山に似たれば、われ移居せんと宣ひて、即ち降り來まして、蒼生を治め給ふ。因て其の地を折居と名づけ、今も巨石がある。かくて京師に參上りて復命し給ひしに、天皇その勳功を賞して、居所を問はせ給うた處、臣願はくば石見の八百山に居て永く皇朝を守護し奉らむと申し給うた。それを御聽許あつたので、更に降來まして、この地の底津岩根に宮柱太しき立て、常磐堅磐に鎮坐した。薨れまして後、八百山の陽尾に葬り奉る。神陵は方域十有一間とあります。尤も他の舊記によつて、崇神・垂仁兩朝の頃の御鎮坐かといふ説もあるが、今日當社古傳祭の内に一月七日の奉射祭(中祭)七月十九日の鎮火祭(中祭)同二十日の御田植祭・十一月二十四日の夜の鎮魂祭・十二月九日の忌籠神事等は、皆この御祭神の恩顧を思ひまつるものとされて居ります。就中奉射祭は御祭神が當地の夷賊を平定して人民の禍ひを祓ひ給ひし故事によるもので、それに七草粥の神事が結びついてゐ